2023.10.04@極地研

物性関係資料について

九大理名誉教授
中山　正敏

物性関係資料紹介

物性研究者の組織

間接民主制

研究室単位で100人委員

100人委員による選出

物性小委員会

基研研究部員

物性研共同利用施設専門委員

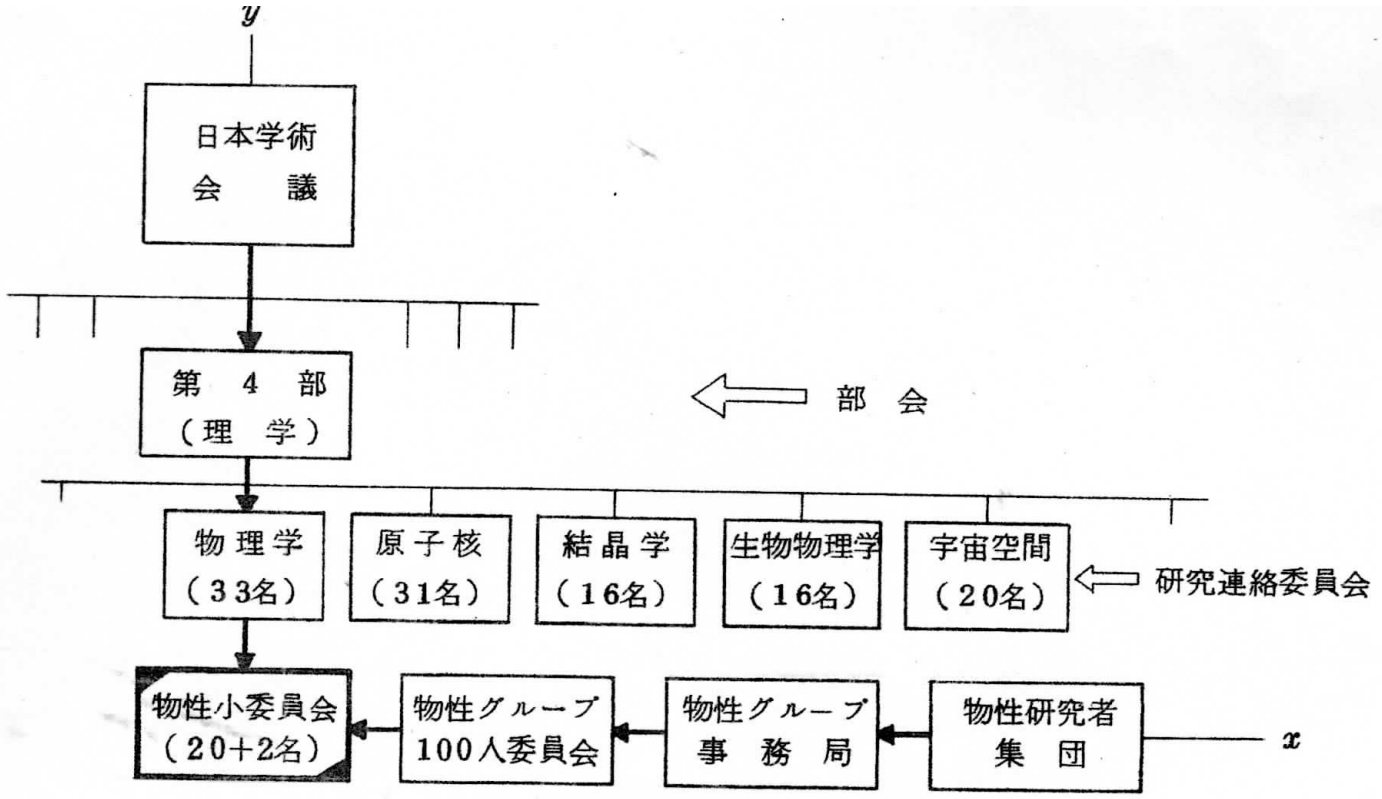

図1. 物小委の位置付け

公式資料:「物性研だより」
非公式資料:Letter　Circular(LC),青焼き

LC青焼き資料:数十個(1960年後半～1980年後半)

発行者:白鳥紀一、中山正敏、近桂一郎

配布先:数十名、同人紙的　資料

内容:会議報告(物小委、基研研究部員会、物性研共同利用委)

　　出席者による私的メモ(公式報告と相補的)

　　関連資料、他の会合報告

　　物性グループの内政問題、意見交換

元若手の70年代1

＊決議三の運動は、物理学の社会的存在、政治的な意味の認識に立ち、研究費の獲得よりも、その政治的な意味を重視した。また、機関としての物理学会の行為を、個々の研究者の行為と区別した。

物小委は、学術会議の物理学研究連絡委員会の下部機構として、第3期(54-57)から各期(3年)ごとに、設置が決められた。初代委員長は有山、以下永宮、宮原、宮原、伊藤と続く。当初は、共同利用機関としての物性研究所の設立が主要な役割であった。その後は、物性研の運営、将来計画、科研費特定研究、日米科学協力などの問題について、物性研究者の集まりである物性グループの議会＋執行部として機能した。

物小委の選出は、百人委員の投票によった。若手研究者枠2名が設けられた

元若手の70年代2

69年に、米沢富美子、蔵本由紀によって、「物性研究の将来を構築する若手研究会」が、基研に提案された。これは、一方で科学の社会性の認識、他方で物性研究の閉塞状況の打破を目指し、既成路線にとらわれない「若手」の結集を目指した。研究部員会で保留となったが、再提案は無かった。

米沢、蔵本、小川泰、川崎辰夫により、物小委の選挙運動が行われた。

勝木渥は、地方大学懇談会を組織して、地方に拠点を置く研究の模索、地方の利害の主張などに着手した。その一環として、基研研究部員、物性研共同利用施設専門委員、物小委の選挙運動を行った。

これらの結果として、69年物小委委員は、大幅に変動した。伊藤、永宮、広根らが退場して、地方大学、大学に残った元若手が多数当選した。

京大グループ選挙運動

資料を見る選挙運動ビラ

物性小委員の変遷

LCの配布先

元若手の70年代3：クーデター

資料

　長岡洋介による報告

これによる波紋

元若手の70年代4

- 「科学・社会・人間」4の発足に伴い、LCは各種委員会の報告に限られて行った。
- その後の物小委は、宮原将平、横田伊佐秋委員長の下で民主的に運営された。特定研究は、普遍性の高い「物性の制御」となった。将来計画としては、超低温超強磁場・極限レーザーなどの極限技術を目玉とした物性研の将来計画と、各地に研究拠点を分散的に配置する佐々木案とが中心的に論じられた。結局、後者が実現した。
- 80年代に、学術会議の制度変更に伴い、物小委のあり方も再検討されるようになった。伊達委員長は、物小委などの再編を目指した。中山は記録担当の幹事となり、発言者名を明記した議事録を作成した。
- 15期に再編が完了した。物小委は常設の物性専門委員会となった。その委員は、物理学会などの学会推薦と研究者からの推薦とを中心とした。百人委員の投票による選出者は数名になった。ただ、例えば勝木は物理学会推薦（学会員の投票）による委員となった。

元若手の70年代5

資料

　勝木による物小委報告

おわりに

- LCは、私的なものであるが、公的報告を補完する資料としての価値がある。
- また、将来計画などについての研究者の肉声を伝えるものである。
- 資料の原本は、白鳥紀一、中山正敏が保管しているが、初期の青焼きは劣化が起こっている
- 一応、すべてｐｄｆ化してるが、判読が難しかったりしている
- 公的なアーカイブでの保管が望ましい